スポーツの力×障がい者の力＝無限の可能性

島津製作所　人事部　加藤　真也

スポーツをすることには、「健康維持」「体力の向上」などの効果があります。スポーツをみることやスポーツに関わることには、「臨場感・高揚感によるストレス解消、そこからくるメンタルの安定」といった精神面での効果などが挙げられます。する・みる・関わる、すべてにおいて「感動」があるものです。

京都市南区にある障がい者就労支援事業所 INCOP の代表・井上渉さんは、自身が子どものころからテニスやスポーツに親しんだ経験、また特別支援学校での勤務の経験からも「障がいのある方に余暇としてスポーツに親しみ、充実した生活を送ってほしい」と願っておられます。

試合会場の設営に当たる加藤

島津製作所ラグビー部 Breakers は、小学校や特別支援学校でキャリアに関する講義やラグビー体験授業を行ったり、地域イベントにチームとして参加したりするなど、社会貢献活動や地域連携活動に取り組んでいます。スポーツを「する」以外にも、様々な関りをしています。

その Breakers スタッフであり、人事部の障がい者雇用担当者（加藤）が、INCOP の井上さんと話す機会があり「INCOP の利用者に、様々な就労を体験する機会を作りたい。そして、スポーツに触れる機会を提供し、余暇としてスポーツに親しみ健康的に過ごせるようになってほしい。」との思いを聞きました。そこに別の担当者から、川崎市でプロスポーツのイベントで障がいのある方が会場設営やチケット販売の役割で参画しているという情報が入りました。「島津製作所 Breakers の活動を通して、就労体験のような活動とスポーツに親しむ機会を作りましょう。」と意気投合しました。

Breakers は、２０２３年秋のラグビーシーズン内にホームグラウンドで５試合の公式リーグ戦開催を予定していました。日ごろのホーム戦では、グラウンドのライン引きや受付準備、観覧席の準備など、限られた人数のスタッフや、その日の試合メンバーに入らなかった選手が役割を担っています。新たな社会貢献や地域連携の機会になると同時に、チームが感じていた人手不足を補うことができると嬉しく感じました。INCOP にとっても、会場設営や試合運営に利用者が参画することは、貴重な就労体験になり、また近くで試合をみることでスポーツに親しむきっかけになると感じていただくことができ、協力体制ができあがりました。

選手が飲むボトルへの給水

ラグビートップウエストリーグ開幕戦を翌日に控えた２０２３年９月２２日（金）、INCOP ではラグビーという競技について理解をしたり、会場設営のイメージを確認したりする事前ミーティングが行われました。そして、いよいよ活動初日を迎えました。

９月２３日（土）キックオフの３時間前、グラウンドに INCOP 利用者６名とスタッフ５名が集まりました。Breakers は、よい試合会場を整え、最高のプレーを引き出すチームの一員として迎え入れるため、チームカラーの赤にちなみ利用者を「レッズ」という愛称で呼びました。

顔合わせのあと、二手に分かれての会場準備のスタートです。

本部席やテント、観覧席、来場者にパスやキックなどラグビー体験をしてもらえるように設けたラグビーパークの準備など、次々と作業にあたっていきます。初日ということで、Breakers スタッフから丁寧なレクチャーを受けながらの活動でした。

試合会場準備が整い、ほっと一息ついたのは束の間、観戦客が来場しはじめます。応援フラッグやメンバー表の配布を行います。

そのうち、選手のウォーミングアップがはじまりました。まだ暑さが残る時期でもあり、次々に水分補給をするボトルから水がなくなります。蓋をあけ、氷を入れ、ボトルが水用かスポーツドリンク用かを見極め、つぎ足していきました。

観覧席の設営

試合がはじまります。次々に空いたボトルが運ばれてきます。ここで時間がかかると、必要なタイミングで選手が水分補給できません。試合の緊迫感に相まって、給水の仕事も緊張感が増しました。手が空いた時間に、利用者同士でどうすれば効率的にできるか、話し合う姿が見られました。

試合終了。Breakers が勝利を収めました。ラグビーというものを見ることがこれまでなかった利用者も、作業に当たりながら試合の行方に注目し、終了と同時に喜びの笑顔を浮かべられていました。

試合後は、観客に配った応援フラッグの回収作業があります。勝利したこともあり、フラッグの受け取りで交わすコミュニケーションも心地よく感じられたようでした。

備品の撤収も終え、初日の活動が終了したのは試合終了から約１時間後。会場入りしてから５時間ほどの活動でした。

次の試合までの期間で、INCOP 内では、「どうすればもっと効率よくボトルへの給水ができるか？」事業所の活動として話し合いの時間は取られましたが、それ以外の時間でも利用者同士が自然に意見交換する場面が見られたとのことでした。

２試合目以降、回を重ねる中で、新しい利用者が加わったり、突発的な作業依頼があったりもしました。そのような場面でも、「どうすればうまくいくか？」を考え、コミュニケーションを取る場面が頻繁にみられるようになってきました。

活動を終えた利用者にインタビューしました。

観覧者の受付で応援フラッグを配布する利用者

利用者 A さん

※A さんは精神障がい（統合失調症）です。10 年ほど引きこもりの状態でしたが、人との出会いの中で INCOP に通うようになり、なかなか前向きになれなかった自分が成功体験や、やればできるということの実感を通して、今では前を向くことができ、毎日の活動に積極的に参加されています。

Q、初めて参加する前の心境はいかがでしたか？

A、ラグビーには身体が大きい選手が多く、怖いイメージがありました。また作業はうまくできるか不安がありました。

Q、１日目の活動終えたときにはどうでしたか？

A、とてもいい方ばかりで、丁寧に関わってもらうことができ、また行きたいと思いました。

Q、回を重ねる中で作業の面で何か変化はありましたか？

A、観覧席の座面板を台車に載せる仕事がありました。１枚ずつ運んでいましたが、重さなどを考えれば一度で３枚くらいはいけると思い、やり方を変えました。早く作業が進むことがわかりました。また、ボトルへの給水作業では、ふたを取る人はそれを専門的にやるなど役割分担をしました。全体的にスピードアップできた実感がありました。

Q、スポーツ・ラグビーを生観戦したことの感想はいかがでしたか？

A、熱量をすごく感じました。応援したいと心から思いました。

利用者Ｂさん

※Ｂさんは知的障がいです。過去に人間関係でうまくいかずトラブルになったり、理解してもらえなかったりと辛いこともありました。気持ちのコントロールや切り替えなどが苦手で人間関係がうまくいかないことが以前はありましたが、INCOP に通ってからは改善するため日々色々な経験を積み希望する職種で就職できるよう成長されています。

観覧席の設営をする利用者

Q、初めて参加する前の心境はいかがでしたか？

A、話には聞いていたが、実際どんなことをするかわからず心配でした。

Q、その中１日目の活動をしてみて、終わった時の感想はいかがでしたか?

A、作業を覚えることができ、やり切った思いがしました。また、（勝利した）ラグビーのお手伝いができうれしかったです。

Q、２日目以降の活動を振り返ってどんな変化がありましたか？

Ａ、自分で工夫したことは何か言葉で表せませんが、早く準備したいという思いから自然に体が動いていました。

Q、スポーツ・ラグビーを観た感想はいかがでしたか？

Ａ、自分は陸上競技をやっていました。集団スポーツのチームワークの大切さやよさが伝わってきました。一生懸命な選手の姿に感動しました。

INCOP　代表・井上さん

INCOP 代表・井上さんからもコメントをいただきました。

「事前に作業やラグビーについて説明をして臨みましたが、不安は大きかったと思います。２日目の活動に入った際、まだ覚えていない作業がありましたが、１日目に手際よくやるために考えた経験から作業スピードがアップしました。自分で動く、みんなで工夫するという意識が高まったからだと思います。利用者は、新聞にも取り上げられ、SNS で活動の報告が上がり、それをみて誇らしい表情を浮かべていました。取り組みの中で、人と関わることが想像以上にできることや、リーダーシップを発揮できることに気づいた利用者がありました。子どもに慕われやすいという発見があった利用者もいました。今後の就労の選択肢を広げることができました。

このような実践の場での経験、スポーツに触れる機会は、今後の人生に大きな影響を与えていると思うので、もっと多くの方にも経験してほしいと思える活動になっています。」

Breakers ラグビー部・山口ゼネラルマネージャーからのコメントです。

「チームカラーの赤いシャツを着て、選手や応援の方が気持ちよくプレー・観戦できる場を作り上げてくれる姿を見て、チームの一員が増えたと大変うれしく思いました。日に日に活動の効率が上がり、任せていけることが増え、我々スタッフが他のそれぞれにしかできない役割に集中できる環境が整いました。レッズのメンバーも充実感をもってくださっているようで大変うれしく思います。これからも、我々とともに活動することで元気になっていく方をどんどん増やしていきたいと思います。」

Breakers 山口ゼネラルマネージャー

今回、利用者のみなさんがそれぞれで工夫し、またみなさん同士で知恵を出し合い活動したことで、自分に自信を付けていかれる機会となった様子でした。スポーツという刻一刻と状況が変わる中で行う作業であり、またスポーツする選手から発せられる熱によって気持ちが高まった中での作業であったことから、「能力を発揮し、さらに能力を伸ばしていく」そのサイクルが早まったと見て取ることができます。

また、スポーツそのものの良さも感じられる機会となり、冒頭に挙げたようなスポーツの効果を生活の中で取り込んでいく利用者の機運が高まったものと思います。

「スポーツの力×障がい者の力＝無限の可能性」障がいに関わらず、適切な目標を設定し、チャレンジする場を提供することで、人は大きく成長できるものなのだと改めて感じることができました。

今後も島津製作所の取り組みを通して人生が豊かになる人をたくさん生み出し、またそのような中から一緒に働くことができる仲間が増えればとてもうれしく思います。